

『靈交』にあとがきを記す。(6)

香川県大島の療養所をあらわす点描

阿部安成

Yasunari Abe

滋賀大学 経済学部 / 教授

多事多端

1934年の年頭から、穂波は多忙を極めていた。霊交会機関紙の『靈交』、修養団大島支部団報の『つばさ』、そして大島の自治会機関紙の『報知大島』と3紙の編集を担う忙しさである(「編輯後記」R:183_34)。「靈交」は創刊よりその廃刊まで穂波が編集を担当していた。1931年に設けられた修養団大島支部の団報『つばさ』は、第5巻第7号(1938年1月10日)ただ1部しか残っていないため、それがどのようなメディアだったのか、ほとんどわからない。穂波が「大島新聞」と記した自治会機関紙『報知大島』は、時期によって編集担当者が異なっていた。現在、霊交会教会堂図書室で保管されている同紙は、その編集担当者の号ごとに合綴されていて、「第二十五号=第四十五号/報知大島 附共楽団報/編輯人 長田穂波」と記された表紙つきのひと綴りがある。第25号は1933年5月1日、第45号は1934年3月15日の発行。『報知大島』はほぼ2回の発刊、『つばさ』はおそらく月刊、そして毎月発行の『靈交』と、「月四回の編輯」をおこない、さらに、自治会評議員、生活改善特別委員、SS教師、集会感話の役もくわり、「寸暇なき多忙」ということだ。

薰風白球

島はときに野球でわく。5月28日に、「職員軍」と「患者軍」との試合があった(「大島便り」R:188_34)。前者の勝ち、だが、後者も「能く戦った」とのこと。6月16日からリーグ戦がおこなわれ、また両軍が戦うという予告記事がある——「此処しばらくは野球大島を現出する」(同前)。6月21日の、「役員軍」と「患者軍」の試合は3対1で前者の勝ち、7月4日の同じ試合も9対7で役員軍の勝ち、負けたとはいえ患者軍も善戦か。7月22日には、島外の香川県長尾町から野球チームがきて、「オール患者

「『靈交』にあとがきを記す。」(1)『彦根論叢』第378号(2009年5月)掲載
 「『靈交』にあとがきを記す。」(2)『彦根論叢』第379号(2009年7月)掲載
 「『靈交』にあとがきを記す。」(3)『彦根論叢』第380号(2009年9月)掲載
 「『靈交』にあとがきを記す。」(4)『滋賀大学経済学部研究年報』第16巻(2009年11月)掲載
 「『靈交』にあとがきを記す。」(5)『彦根論叢』第384号(2010年夏号)掲載

軍」との試合では16対0で7回コールド勝ち、「患者軍は『とても対者でない』と呆然たる様」となり、役員軍をも5対0で降した。「余りの強敵」「強さも強し長尾町軍」だった(R:190_34)。

職員や役員と在園者たちとの日々の交流がどういったようだったのか、簡便な記述からはそれはわからない。また、「癩予防法」のもとで、島外からおそらく慰問目的で野球をしにくるばあい、どういった手続きが必要だったのかもわからない。ただこの記述から、大島療養所での園内融和を説こうとすると、それは軽々しい判断となるかもしれない。在園者から聞いたところでは、かつて職員たちには二重基準があったようだ。たとえば、魚捕りにゆくときは親しげなのだが、同一人が公務として郵便物を持ってくるときには、端をつまんで投げるように渡すというのだ。

瞑想と祈禱

多忙な穂波は、『霊交』第185号(1934年4月10日)から1つの連載を始め、いっそう忙しさを増したようにみえる。最初は「瞑想と祈り」、つぎからは「瞑想と祈禱」の題となった「神の聖前に黙する時は楽しき哉、神霊は輝きもて静かに迫り来るなり、導かるゝ任に天に昇り地に降り、海の底の魚とも遊ぶ、神の聖前に黙する時は楽しき哉」と始まるこの連載は、信仰の証しや神への感謝の記録としてのみあるのではない。ここには、「レエニン」「マルクス」「資本」「剰余価値」の語が、あるいは、「皇国日本」「祖国」「日本国体」といった観念を用いた思索があらわされている。

ここには、キリスト教信徒として、1930年代の日本に生きるものとして、そして、大島の療養所の一室でひとり読書する穂波の意思がある。この論考は、飛びとびにではあれ、『霊交』廃刊まで掲載される。

【資料】

保奈美「大島たより」『霊交』第182号、

1934年1月10日

「○小委員会を設けて、『生活改善』を計る調査に着手致して居ります、療養所患者生活の根本調査を為して、節約の出来る点は何処迄も節約をなし、改善を要する点は改善をなし、増加なさざるを得ざる点は増加するべく、即ち生活の合理化を目ざして居ります。結果は、如何なる調査表が出来上るか、大なる興味がある問題であります。／○第一は、『私共は如何なる物を節約すべきか』と『如何なる物を増さねばならぬか』であり、次に『作業の如何なる点を改廃し新設すべきか』であり、『患者自治会の委員の増減及び待遇に関する事等であります。次に『出来るだけ節約した上で、何程の小ヅカイ銭が入用であるか』と、『何故に小ヅカイ銭が必要であるのか』等々幾十件に渡りて調べつゝあります。／○以上の調査の結果として、作業賃金の割当及び作業の等級と作業従事者の資格を定める事も出来ませうし。作業不可能な者に対する互助金の問題も弥々改善されると存じます。現在の処では、如何に節約しても小々の送金を故郷及び知人より仰がねば、何としてもヤリキレないのが実際であります故に、出来る限り合理化を計りて、役所よりの下附金の分配を公平に為し、且つ自活会の事業部等を盛にして、斯る問題を解結なし度い希望であります。所長様にも、『是非なくてはならぬだけは充して』故郷や知人に迷惑を掛けぬでも生活の出来るやうに為てやり度しと、仰せられて御努力下さつて居ります。／○患者の青年団の内に火防組が出来まして、演習を致しました。青年団を義務制にして、大いに奉仕されるらしい意向と承ります。婦人会も追々と奉仕事業を初めて、活躍されて居ります。作業者の精神が今少しく互助と励勉とを加えるならば、島は大いに明るくなると

思ひますが、作業者の心に未だ暗い影が残つて居るやうであります。／○患者委員の苦心は一通りでありませんが、最も困難なものは、無自覚な言行者のある事であります。社会道德心の欠乏は、一般の迷惑であります。賭博とか飲酒とか逃走とかを企つる者や、喧嘩を好み、面白がりて乱行をなす者は、相当の制裁を為して、更に悔改せざる者は、島外に放逐しても五百余名の所内の治安を保たねばならぬのであります。／○一般社会人の療養所に対する認識不足な点は、『所内の治安』と言ふ事です。何でもかでも、療養所にさへ投込めば良い、療養所内では何をせやうと放任して置く如き態度と考えると有せらるゝのであるまいか。それでは、所内の善良な患者の迷惑は如何にする、善良患者が療養所を忌避する事に成るのであります。『所内治安』の爲めに、悪者を嚴重処分する事は当然で、各県当局者もこの点を御含みが願ひ度いのであります。」

会計係「感謝欄」同前

「一、金貳円也、京都、五味菊江様／一、金壹円也、大島、奥村竹一様／一、金貳拾円也、高松、モアー様／一、金壹円也、徳島、大野鶴一様／右、御礼申上ます、会計係」

*「編輯後記」同前

「○毎月十日の原稿メ限を、今回は仕事山積のために、独り勝手に編輯を早く終りました。それでなくても個人雑誌に似て来つゝある本誌とて恐入りましたが、御免し、御辛棒をお願い申上て、先ず年頭の初号を差上げます。福音の内味を、成るべく今年も盛り上げて行き度いものと祈りて居ります。／○活かさるゝ処には必ず使命があるとの確信は、現世が甚だ明るく存じられますし、如何なる場合にも生の希望を失ひません。私は言ふだけでない体験してゐます、『私を見て下さい』、嘘ではありません。これでも活る使命に多忙でありますものを！／

○不完全なくせに高慢に成りたがる私の心を何卒、鞭うつて下さいませ、御叱訓下さいませ、神の聖前に立ち得るやうに、常に御加禱下さいませ、凡ての働きを益あるやうに御援助下さいませ。ウンと働きませう。／○梅の花も近く雪の下にて香り出ませう、黄鳥が美しい曲を奏じ初めませう。その頃になりますと、島にも春の気分が催しますが、現は名のみの春にて、海を渡る風が不自由な手足を真赤に凍らします。炬燵のヤグラにかじりついて火傷を為したり、灰神楽をあけて大騒ぎを演じたり、冬籠りの中に『明けまして御芽出度ふ』と申します／○ぬくとい物を着て、ぬくとい物を食いたいねと笑ひ合ふ一室十名が、故郷のお正月をば夢の如く語り合ひて、なつかしい思い出にソツト涙を拭ふであります。しかし、人の心は何となく新しく改つて居ますから、青年などは百人一首だ、短歌会だ、等々と勇ましい笑ひを室一パイに充すであります。／○兎にも角にも、新しき恵の年ですから、ウンと神と人とのために活きぬき度いと一年の計は定まりました。冬は去りて春は来ぬ、強くつよく十字架を負ひて進みませう。キリストの歌を唄ひつゝ！／○今年は祖国を潔めるため祈りませう。全人類のために、日本と言ふ万邦無比の国が立つて尽さねば成らなくなつて居ります。キリスト教徒は、特に全世界のために、祖国日本を神のものと為すべく祈らねばなりません。／○私共、霊交会は一同とも力を合せて、皆様のために祈り度いと存じます。祈りは我らに残されし大切な使命であると信じて居ます、祈り活くる尊さを体験いたします。／希ば神の恵み、各位の上に豊かならん事を一」

*「感謝欄」『靈交』第183号、1934年2月10日

「一、金貳拾円也、高松、モアー先生／一、金貳円也、京都、五味きく江様／一、金壹円也、大島、奥村竹一様／一、金壹円也、徳島、大野鶴一様／一、金参円也、大阪、松村洋様／一、金拾五円也、高

松、エリクソン様／一、金七円也、高松、東基督教
会様／一、金貳円也、高松、高橋七五三様／一、
金五拾錢也、高松、中野太助様／一、金貳円也、
群馬、高橋音市様／一、金貳拾円也、倉敷、林源
十郎様／一、金壹円五拾錢也、京都、松尾相様／
一、金壹円五拾錢也、平塚、山本徳義様／一、金
壹円也、倉敷、井上孝子様／一、金壹円也、下関、
坂本皆之助様／一、金參円也、上海、深見幸雄様
／一、金貳円也、香川、鹿角義助様／一、金貳円也、
松山、青野兵太郎様／一、金貳円也、東京、後藤
安太郎様／一、金拾円也、岡山、田中文男様／一、
金壹円也、京都、高瀬時助様／一、金五円也、神
戸、神戸教会様／一、金壹円也、北海道、能見利
秋様／一、金貳円也、東京、宇津木勢八様／一、
金壹円也、広島、中山国三様／一、金壹円也、京都、
吉田義子様／一、金貳円七拾八錢也、佐賀、宮内
彰様／一、金參円也、京都、志村卯三郎様／一、
金五円也、御影、名和金次郎様／一、金貳円也、
京都、伏見以美教会様／一、金參円也、安中、内
田久治様／一、金七拾錢也、東京、水野国次様／
一、金貳円也、大阪、広瀬広治様／一、金六拾錢
也、香川、植村徳太郎様／一、金參円也、京都、
福永キリエ様／一、金拾貳円參拾七錢也、東京、
浅木春見様／一、小豆沢山、北見、中村恵様／右、
厚く御礼申上ます」

*「編輯後記」同前

「○編輯子は現在はず暇なき多忙であります。／
大島新聞の編輯と靈交の編輯と修養団支部の団
報編輯と月四回の編輯であります。次に自治会の
評議員としての務めと生活改善特別委員としての
務めとSS校の教師と集会の感話とであります。次
に各地への原稿書きと俳句の選評と手紙での身
の上相談に應ずるのが、即ち毎月の使命であり
ます。／終日ウンと働いて未だ不足で、夜る迄も
時々働きます、然し有難たい感謝であります。今月

と来月とは特に多忙で其中で出来あがりました、
粗雑な点は御辛棒を願ひ上げます。／○各方面よ
り多大な御同情を頂きまして、何とも言へぬ大喜び
で御座ります。肉身の者も逃げ離れ行き、一人淋
しく打ち捨てられし私共病者も、皆様の熱い愛に
生かされます。殊に穂波を通じて或種の兄姉に愛
の手を伸して下さいます方々に、特に『その兄姉
にかわりて』厚く御礼申上ます。／○ミズレが降り
ます。寒風が肌に喰ひ入ります。海の面は蒼黒く騒
立ちます。祈り家の表に茶山花が薫つてゐます。／
感冒が流行しますから御注意なさいませ。／皆様
の御幸福を祈りつゝ、擱筆いたします。」

*「感謝欄」『靈交』第184号、1934年3月10日

「一、金壹円也、高松、三井芳太郎様／一、金壹円
也、朝鮮、高橋亀太郎様／一、金壹円也、高松、
森川なか様／一、金五拾錢也、高松、山本シメ様
／一、金五円也、高松、三番町教会様／一、金壹
円也、東京、田中儀三郎様／一、金五円也、倉敷、
高戸猷様／一、金五円也、京都、丹羽喜隆様／一、
金壹円也、滋賀、西井知与様／一、金貳円也、京
都、村上幸太郎様／一、金壹円也、島根、栃木英
夫様／右、御礼申上ます。／尚ほ前号本欄の中に
て、一、金貳円也、京都、伏見以美教会様とあり
ましたのは、伏見メソジスト教会様の誤りでありま
した故に訂正いたします。尚ほこの外に万一にも誤り
や記入もれがありましたなら、御ゆるしを願ひ上げ
ます、然し御礼状が御手許へ届かず、又本欄にも
記入ありません場合は、御手数ながら御ハガキに
ても御照会下さるやう願上ます。穂波に御預け下
さいました分は、本欄には記入致しませんから、左
様御諒承を願上ます。」

*「編輯後記」同前

「○今日は陰暦の一月一日だからとて、連日の勤め
故に一日暇を下さつた。其休暇を利用して本号の
編輯をする事にした。朝早くから一生懸命どうや

ら目先がチラヅク程に疲れた、自分の体で自分の手で一日に三十枚の原稿は実際に無理だ、無茶を
するないと全身が言ふて居るやうだ。／○隣の庭
の紅梅が二、三輪咲き初めて時々雀が来てゐる。
果樹園開拓にいつて居た人らしい、帰室した、有
難い事だ、奉仕作業だから一入に思はれる。日蝕
だと言ふに曇つて駄目だ、サングラスは破れて居る
し。勝海舟伝は有益だ、本が四、五冊届いたが読
む暇がない、早く四月になつて欲しい、ユツクリ読
み味ひたいものだ。／○ヤツト編輯も終りと成つた。
偽らぬ告白は下手でも心強書けるから嬉しい。／
では皆さま感冒なさらぬやうに。」

ほなみ「大島たより」『靈交』第185号、
1934年4月10日

「○皇太子殿下御降誕奉祝記念事業と致しまして、
水ヶ浦開拓を決議いたしまして、早速着手いたし
ました。愛国と愛島の精神に燃える五百有余の患
者は、男子は元よりのこと、女子と言へども甲
斐々々しく手伝ひまして、『全き奉仕』で作業は予
想以上に進行致しまして、初掘は早くも終りまして、
いまや正に二度掘にかゝらむと致して居ります。三
反半の果樹園は近く完成致しませう。／○兼て生
活改善なり作業互助の改正に着手いたしまして、
各方面に根本的に調査を致しまして、来る四月より
面白一新する事になりました。改正案は五百余枚
の広文章となりて、実行に当る常務委員と御役所
とに提出されました。益々善くなるのみであります。
／○過日は、九州の療養所を逃走して来た者と、
アナキストを以て自任する者と、モヒの中毒患者が、
モヒを思ふやうに注射して呉れない不平より、漁村
の舟をぬすみて逃走致しましたが、モヒ中毒者が
高松で倒れまして、『待遇が悪いから』逃走しまし
たと語りましたので、ラヂオで全国に報道されます
やら、各新聞で報道されますやら致しまして、一
同は大変な迷惑を感じて居ります。殊に八県の

人々に対し、／皇太后陛下に対し奉り、申訳のな
き次第と恐縮いたして居ります、然し待遇も無自
覚者に好適では面白くないと存じます。／○今春
は大島療養所の開所満二十五年に当たりますので、
過日も新旧役員懇談会が開催されまして、沢山の
来会者がありましたが、見ちがえる程に年寄せら
れし人、また見ちがえる程に若返つて居られる人、
昔なつかしさに会場が充たされました。一人々々
の御顔に姿に、大島の過ぎし歴史が思ひ出されま
して、二十五年の島の変転にウタタ涙を催した程
の感激でありました。今月の末頃には多分、記念
式が挙行されませう。島の歴史は自分の歴史であ
り、日本癪問題の古い歴史であると存じます。／○
今度、米国のMTLより大島キリスト教の礼拝堂
を新築して下さる事に決定致しました、四間に七
間の建物に図書室が附属いたしまして、鉄筋コン
クリートであります。設計は近江のセールス会社の
有名なヴォーリス先生に依頼されるとの御話であ
ります。現在のバラック建は三年以前の建築で、
二間に六間、それに押入が一個所と図書押入が二
間とであります。私共のレプラ献金を以て造りま
したものでありまして、未だ丈夫であります、こ
れはトリノゾきて其跡へ立派なものが出来ると、
大島の風景をも一つ加える事になりませうし、私
共は大変に喜び、且つ神に感謝いたして居る次第
であります。／○靈交誌も益々御用を命ぜられま
すし、殊に十万の癪者と何百万の肺を病む人、甚
だ多い神経衰弱者等、実に慰めと福音とを配らね
ばならぬ処が沢山にあります。然し、経済には限り
がありますし致しますので、今回第三種郵便物とし
て認可を申請中であります。神の為め皇国の為め
に報恩として尽したく、且つ残る使命に努力致した
いものと祈つて居ります。穂波著の『回春の太陽』
は大変に愛読されまして御励しの御手紙を数々頂
き感謝いたして居ります。また近く岐阜県より『神

は活く』と題した国民トラクトが出版される筈であります。出版になりましたら、御愛用を願ひ上げます、五頁ほどの小冊子でありませう。」

*「感謝欄」同前

「一、金壺円也、坂出、戸山誠二様／右、御礼申上ます。」

*「編輯後記」同前

「○すこし暇になりかけた、心がユルムせいか全身がウヅクやうに感じらるゝ、然し大丈夫だ、今後は祈りを第一に、勉強を第二に、証言を第三に、そして神を崇むる原稿をば記して活きたい。地上に何の執着もなく、久遠の生命を追ひ求めたい。／○島畑に規子が現れたとの事、珍らしい話である、二十五年になるが鳩とモズとスズメとカラスとトビとタカとヒワと五位サギと千鳥とツグミと目白と鶯とホト、ギスとの外は知らなかつた。島に住む鳥や渡り来る鳥は、大てい定まつて居るらしい。／○祈りに祈る、『神よ読む人の幸福のために、汝の聖旨のよしとなし給ふ事を記さしめ給へ、我れ何者なれば人を訓し得んや、主よ汝こそ訓しの力なれ』と祈りに祈る。編輯する事は神の聖前に恐ろしき事である。それだけ確信をも強めらるゝ。／○会の雑誌か、穂波の個人雑誌か、それは何れでもよい、只神に栄光あれ、人に幸福あれの祈一つでかためたい。編輯子の愛国精神が甚だ強く、皇室中心主義を地上生活の目的とする。故に宗教を日本的に記し易い、しかしながら『日本を通じて全世界の救ひ』を望むのであつて、日本の内に縮み込むのではなく、また外国を敵としての愛国ではない／○また社会学とキリスト教と言ふ事も、政治とキリスト教、経済とキリスト教、教育とキリスト教、科学とキリスト教、哲学とキリスト教等の事も考えない事はない、しかし信仰は個人の体験に重きを置く、社会機構と其救ひと言ふ問題には心附いて居るが、この境遇に居て叫ぶのは何だか恥しい身分だと考

えらるゝので、可成に避けてゐる。／○春うらゝになれば日は永くなる、花の下に血は狂ひ易い、そのまゝに棄てをくと、やがて散る花と共に、人格も生命も散して仕舞、若人がすくなふくないと思はるゝ。福音を伝えざるべからずである。如何なる時にも聖書の権威が輝かねば、愛する同胞は滅亡んで終るかも知れない。／○各位聖霊を受けて益々奮闘努力せられむ事を祈りつゝ、擱筆いたします。」

ホナミ生「大島たより」『靈交』第186号、
1934年5月10日

「○世を捨て、孤島に余生をつなぐ人間は俊寛ならずとも、鬼界が島ならずとも、そゝろ故山なつかしく、花おぼろに暮る春宵、月さやかに昇る晩秋、胸に充ち来る熱き涙を、歌に詩に詠じ晴さむこと、如何に心やりのせめてもの慰めであります。されば、我らには余技に非ずして生命を懸けての著作であります。九州にも東京にも、立派な歌壇の後援がありて、広い社会の歌壇に紹介さるゝ光栄に浴してゐますが、大島には斯る後援がありませんので、伸びるに遅れて居りましたが、今回、薬局の小塚先生が、短歌を指導されまして、大いに見るに足るべき作品が現れるやうになりました。然るに、いま又、月並よりのぼり得ざりし俳句をば、更に新しく生命づけんとしてホトギス派の旗を押し立てゝ、同じ薬局の川染先生が指導下さる事になり、大いに勢込んで居ります。短歌の作者が八十余名あり、俳人が百余名あります。／○大島キリスト教の礼拝堂の設計図が出来て参りました。本館は四間に六間でありまして、附属図書室は四間に四間あります。立派な形の礼拝堂が出来ると共に、内的に信仰のりバイバルも恵まれ、神の生命の一層に我らの内に輝き昇りて、『残されし使命の祈』を励み度いものと祈つて止みません。／○時代の浪は物質の岸に憧憬して、神を後にして彼方へ彼方へと遠く打ち寄せて行きます。政界にも不正暴露とか何

とかにて高官連が退かるゝ、教育界にも神聖な職席を金銭にて汚したり、技量にて得べき学位が是れまた金銭で売買したり致すと言ふことで、函館市を舐めし大火以上の恐怖すべきサタンの火が、国道徳界に燃え広がって居ります。斯る末法の世に於ては、特に祈人が大切であります。路傍の石をもアブラハムの子孫となし、小さき者をも天器となし給ふ神を信じて、私共にも現や重大なる使命に立たしめられし事を信じられます。過日も日本MTL誌に、この事を書きましたから何卒御よみの上、御指導下さいますやう願ひ上げます。／○四月十二日に宮内省官房総務課長の鹿児島閣下が御光来下さいまして、『神を信じ凡てに感謝し、且つ報恩の生活たれ』とて、皇太后陛下の御仁慈の一端を御話し下さいました。承りつゝ有難さの涙を催しました。我ら何者なれば斯くも尊き御聖旨を頂き得るかを思ひては、恐懼の至りに存じました。／○過日、印度の療養所の所長、アイザック・サントラ博士が御来島になりました。長島の愛生園の林文雄博士が同伴でありました。歓迎会席上にて、大変に愛と慰めと励しに富んだ御挨拶を頂きました。／不便な島とて訪問客の少ない大島にも、斯くした珍客を最近度々お迎えいたしまして、益々明るくなるやうに感じられます。／○近く患者共楽団の催にて春芝居が出来らしく、同好の兄姉は熱心に練習を致して居ります。聖代の恩沢によりまして朗かな生存をばゆるされて居ります。患者総員五百三十余名の多きに充ちて居ります。開所以来満二十五年に相成りました。』

霊交会々計係「感謝欄」同前

「一、金参円也、東京、西村勝美様／一、金壹円也、高松、穴吹つや子様／一、金参円也、東京、堤薫一様／一、金参円也、大阪、西田五郎様／霊交誌代／一、金六拾銭(一ケ年分)、神戸、塚田喜太郎様／一、金参拾銭(半ケ年分)、高知、谷愛美様／

穂波個人への御全任の分は報告致しません／四月十日、霊交会々計係」

*「編輯後記」同前

「◎花曇りの空はなつかしい、陽も風もやはらかに、小鳥の唄は夢の国から聞ゆるやうである。こんな日に、苗床に蛙を追ひに行きてみると、たんぽゝの花、紫雲英の花、夏豆の花と畔より畑へ、畑より田へと彩て遙の村に牛のものうさうな声を聞いて、独り春の詩を作つて唄つたものだ。／公園の桜花見も、彼の騒がしいのがいとはしくて、遠い静な場所より見晴るかしつゝ、弁当を楽しみ食したものだ、子供の時分からお寺の庭に咲く桜を方丈の広縁より黙つて長い事見入たものであつた。／現は梢を霞む老松の下で、赤く咲くつじを眺めて田園の春のむかしをなつかしむ。／◎過ぎし半ケ年の多忙な労働の疲れか、何となく全身がケダルクてならぬ、昨日は面会人があつて嬉しく一日を過した、今日は原稿紙と首引きをした。心には十二分に信じて居りながら、書き現すと氣に喰はない、『我は生命なり』など後日改めて最少しハツキリ書き改めねば、何だか物不足に思へてならないのである。然し大略は解して頂けるであらふと思ふ。次号までには勇氣を養ふて置きて、ウンと励ませう。／◎種々な書物に由りて教へらるゝ、読んで人格の低い自分を恥じ、信仰の弱い自分を悔ゆる。雑誌は沢山恵送して頂き、各種な社会の智慧や動きを視て、頂く、孤島の病床に明け暮れる身には、書物や雑誌は社会鏡であり心の友である。一時新聞も恵まれて居たが現はない、図書室へ行けばあるが、行きて他人の読了を待つて居る時間がおしまれるので、ラヂオのニュースを聞いて世界を察してゐる、然し有難いことである。／◎今年は神ゆるし給へば、『霊交誌の中の記事で信仰の糧となるもの』を集録して見たいと祈つて居る、御用にたつならば一冊にして広く使用して頂きたいと思つて

ゐます。神に全任しきつて二百号に近づく事が出来たのは、誠に奇蹟であると存じて居ります。世には博学多才の先生が出て居られる雑誌さえ中止なる景気の時に、愛読者は増加なし、多く用ひて下さる方も出来て、真に愛さるゝ処に生かされるゝ実証でありまして、深く感謝いたして居ります／◎六百部出て居りますが、内容の点もあると見えまして第三種郵便物の願ひは不許可となりました。然し局長さまも御研究下さる事と成りて居りますから、後日改めて出願いたす考えで居ります。経済上よりも誌の発展上よりも、是非とも許可して頂きたいものであります。では今号はこれで擱筆いたしませう。／皆様の上に神の御恵ゆたかならむ事を！」

ほなみ「大島便り」『靈交』第187号、
1934年6月10日

「○四月二十七日、陸軍少将辻閣下が御慰訪下さいました。七了口の敵前上陸の実戦談より、神に祈らざるべからざる事を力説主張せられ、且つ信仰の大切なことを勧告せられました。誠に軍人らしき御話し振りに感激いたしました。／○五月一日、北国の聖者と言はるゝ亀谷凌雲先生が御来教下さいました。先生は蓮如上人の御血統にて、御住職であられし方とて仏教の奥義をも有せらるゝ方とて。先ず弘法大師のイロハ歌より説き起されて、イエスの御救ひに説入られました。実に感激の極みでありました。／○五月二日には、真言宗徒の同体会の祖師千百年の奉祝会を兼ねて詠歌競詠会が催され、高松より佐伯僧侶他多くの御来島があり、信徒の方々は兼て練習した巧な節廻しを立派に演ぜられた。一等は藤田さんで七等まで選賞があつた。此日一般参列者にクジビキがありて、歓を尽しました。／○五月五日、この日には姫路のエカク女史が御来教下さいまして。黙示録にある七つの幸福について懇切なる御導きを頂きました。私共

は聖書の宝を一つ増加して大変に喜しく存じて居ります。／○五月七、八の両日には、午後の七時より患者の芝居の催がありました、七日の夕は新派で、八日の夕は時代物で、弁当を作るやら全島大賑ひであり、芸も仲々精進の効がいちじるしく現えてゐました。当所には春秋二回は芝居が催されて楽しむのであります。／○五月十日、この日は真言宗と日蓮宗と真宗と其他の仏教徒聯合にて、花祭りが行はれました、献花や献茶や仏讃歌など式はなだらかに進められた。講話は佐々木隆栄師であつた、佐々木師は県下有名の布教師との事であります。浄らかな一日が島に過されました。／○五月十一日は、香川県神職会主催にて例年の如く病氣平癒希願祭が行はれました。この祭りは大島の春祭りとして定められまして、毎年この頃に執行され、役所よりはおすしの御馳走が渡る事になつて、年中行事の一つとして一般に楽しむ日なのであります。今年も式の後で浪曲の慰問があり、神職会は供物と言ふ名の下に御まんぢう一包み宛を贈られ、一日歓をつくしました。／○この日かねて私共に御同情深き、大阪の北村寿四郎師が突然に宮内師の御案内にて御来島下さいましたが、島の春祭りの当日の事とて、思ふまゝの礼拝も出来ず御別れ申した事は甚だ残念に存じましたが。何分島全体の祭日の事とて、致方ありませんでした。／○長らく休会いたして居りました。聖書研究会も一部会員の要求によりまして開く事になりました。穂波の多忙と他に少し事情がありまして、止むを得ず休会して居りましたが。只の三人でも今後は休みなく継続して行き度いと祈つて居ります。／○大島も近來は開けて参りまして、種々なる集会が甚だ多くなりました。殊に名士の御来訪が繁くなりまして。この不便な土地も甚だ明るく相成りて参りました。(五月十一日)」

会計係「感謝欄」同前

「一、金壺円也、大島、奥村竹一様／一、金五円也、高松、トクメイ様／誌代／一、金壺円也、東京、大戸ルノ様／一、金六拾銭也、東京、柴田栄治様／一、金貳円也、大阪、北村寿四郎様／右、有難く受納仕りました、会計係」

*「編輯後記」同前

「○早や桜は散りはてた、常なき人の世の姿である、色は香えと散りぬるを、我よたれか常ならむ、有為の奥山今日越えて、浅き夢見し、ゑひもせず。諸業は無常であると視る仏教は正しい、表面の世界は凡て無常である。然し斯の無常は目的の下に於ける無常なのであつて無目的ではない。目的……目的、無常の奥の大なる目的、此処に我が神は在し給ふ。この無常も又神の活ける御活動の証明である。此処に死を越して意味がある。／○近頃自分は神秘と言ふことが深くして、近き姿をもつて追つて来るのを切に覚ゆる、それでキリスト教神秘思想を出して読むと凡ての記事がなつかしい、何となくピッタリと来るやうに思ふ。余り科学的なものに鼻ついての反動でないかとも思ふが、自分は性質として深いキラメキを凡の上に発見せずに居れないのであるらしい。／○今号は、『宝血の聖能』について記しました、教会が不振とか信者が冷たいとか耳にするが、無理もないのでないかしら。宝血すなはち十字架の御救ひの力が十分に受け入れられて居らないのでないか。宝血の聖能が救はでは居れない生命であると知つたならば、自分に受けし血の能力を自分の内に聞くべき筈である。この血の能力の内外の活動こそ、聖霊の活動であらずして何でせう。キリスト教は信ずるが、斯の聖能を頂て居ることを知らない者は。兵隊にはなつたが銃を持たない軍人と同じである。／○何派も何主義もない、只一つのキリストあるのみ、凡ての宗教的問題は知らない、只一つキリストを信仰する

のみ、結果は神に任せて宝血の聖能に頼りて活きぬくのみである、其外に何も出来る私ではない、もし何か行えは必ず罪の道に入る恐れがある、只キリスト一つである。／○今の間にウンと従行せんとキリストの再臨は近い、たとへ再臨は遠くとも私の地上の肉体の休みが長い向ふでないかも知れない、オー主よ心ゆく迄も導き給へ……。／○雨の軒に雀が来た、ぬれて居る三羽は子で、二羽が親らしい、井戸端より何か持て来ては、三羽に喰はしてゐる。あれは我が霊と神との姿であるまいか。／○窓外の鉢植の花に虻が来てゐる、昨日も見た虻だ、一寸見てはわからないが蜜があるのであらふ。人生の畑には種々な出来事がある、一寸と見ては苦しいのみだが、能く心眼を開いて尋ると神の血蜜がある！」

会計係「感謝欄」『靈交』第188号、

1934年7月10日

「一、金壺円也、栃木、村松藤枝様／一、金壺円也、姫路、浜本二郎様／一、金五円也、広島、羽生正信様／一、金貳円也、岡山、長島無名様／右、誌代として頂きました。会計係」

*「大島便り」同前

「○五月廿八日、職員軍と患者軍と野球試合があつた、結果は職員軍の勝となつた。然し患者軍も能く戦つた、殊に池田投手は立派な技量を見せた、先途大いに希待するものである。／○五月廿二日、エリクソン師一行と小出師と御来教。小出師はセブンスデーアドベンチスト派の牧師であられる。／○五月廿七日、古義真言宗主催の故小林所長並に死亡患者の追悼大法会を執行された。僧俗三百名来島され盛大であつた。／○五月廿九日、活動写真をとりに来て居る人があつて各方面を走り廻つて居られた。／○六月四日、高松の赤新聞社よりカフエー女給の舞踊を連行慰問して下さつた。／○六月五日、東郷元帥の国葬を遙拝する式

が行はれた。／○六月十日、青年団が主となり特定室の大掃除が行はれた、不自由な者は大喜悦であつた。／○六月十二日、エリクソン師御一行を迎えて聖晚餐の式を挙行して頂き、新しく深く主の十字架の救ひを記念し充された。／○六月十五日、岡山の難波先生の御尽力により、高橋正雄氏の飼犬トミーの種々なる芸当を見せて頂き、大いに教へられる処あつた。／○六月十六日より、患者のABC組のリーグ戦が行はれる筈、又職員軍とオール患者軍とのカップ争奪戦が行はれる筈にて、此処しばらくは野球大島を現出するのである。今夏は外部より来戦軍があるか？／○同日、真言宗高野山管長代理が御来島ある筈であつて準備して居る／○六月十八、九日の両日は、療養所の予算会議であるとの噂である。／(次号にてくはしく)」

*「編輯後記」同前

「○編輯子も大島に来てより二十五年と三ヶ月に成る、信仰の生活に入つて二十一年に成る。大きな感謝である。霊交誌の筆を起して二十年、その間を導かれ援けられて前進いたした事は、何と申て宜敷やら適当な文字を見出し得ない程の喜悦である。この深く高き恩寵を何とか記念したひものだと思はれるが、微力貧愚とて別に善き考えも浮ばないが、自分の存在よりも受けし恵を祝ふべきであると内心よき方法を思案しつつある。／○今号に単純ではあるが御答への要領だけ記して置きました、御一考を願ひます。又この林健作君の原稿も味のある読みものと信じます。本誌は文章は駄目ではありますが、確信に充たすべく祈つて居ります。／○六月号の『宝血の聖能』は恵まれまして各方面に反響がありました、信仰の水の動かざる悲しさを破る一つの器ともならば大なる感謝であります。毎号の祈りは、『たゞ一人の霊にても救ふ器』たらしめ給へである、早く第三種郵便物となり紙価も

下げ部数も増加し、貧しく病める兄姉の枕頭へ送りたいと存じます。祈るや切であります。／○梅雨の中にペンを執て居ると神経痛をおぼえて来る、友が菊をサシて居るのか井戸端に菊の小枝が捨てある。アンテナ線の上に雀がとまつてゐるかと思ふと、燕と交代して居る。先日植えた鉢の朝顔がなさない小葉を上げて来た。しかし去年より防葉につとめた結果と見えて、蠅と蚊とは甚しく少なくなつたのが、神経にサワラないので大いに助かる。／○皆さまの御幸福を祈りつゝ、擱筆します。」

*「感謝欄(七月十日迄)」『霊交』第189号、1934年8月10日

「一、金壺円也、石川、小島伊助様／一、金六拾銭也、平塚、トクメイ様／一、金拾円也、倉敷、林源十郎様／右、誌代及び御寄附を御礼申上ます」

*「編輯後記」同前

「○今年は梅雨が少くて稲の植附の出来ぬ地方が多いとの噂、誠におの気毒な事と思ふ。化学の文明のと言つても、以前として、凡ては神の力に養ひ育てられて居る事がハツキリと理解される、『一粒の米』にも神への感謝と祈りとを忘れたくありません。／○本誌も御蔭で第三種郵便物認可になりました、何卒広く病める人、悩める人の為め、神と同胞の悦びの為め御利用下さいませ、殊に伝道用ならば実費で御分け致します。尚ほ、『振替口座徳島四三九二番』に加入致しました故に、『長田穂波』宛に御利用下さいませやう。尚ほ是らの事について一方ならぬ御配慮頂きました、倉敷市の林源十郎様に厚く御礼申上ます。／○前号は編輯子は多忙と林健作兄の原稿を頂いたのとで済しましたが、今号は余りにも汚れし現在を想ひ、『救ひとは聖なり』を記して見ました、又、『冥想と祈禱』は経済学より視た人間生活の真髓を一寸と考えて祈り居ります。／○冬来れば夏をよし、夏くれば冬をよしと言ふ我儘者の多い中に、編輯子は夏を断然よ

しと頑張ります。不自由な手足が裸で動かし良いからであります。流汗三斗で暑さは辛棒がつらひが、以前として夏を愛します。／○大島便りは大分記事がありますが、何か書くとき直に紙面が一杯になりまして、お終ひになりますので次号の都合で述べませう。恵まれますれば紙面の改良も致して、求道者欄と我身の物語欄と聖書研究欄とを加へたいものと祈つて居ります。／○神の御用は甚だ多忙であり、未だ残されし使命は沢山であります。刈入れものは多く働き人は尠し、父に工作者を送らむ事を祈れと仰せられてあります。時は四ヶ月残つて居りません、主の再臨は迫つて居ります。／○然し、未だ未だ仕事が押し迫れば働けると思ひます、私の如き者でも御用があれば似合つた働きを御送り下さいませ、『神よ昇天を赦さるゝ光栄の瞬間まで御用多に恵み給へ』とは切なる祈りであります。／○本誌も近く部数を増加せねばならぬやうに相成て居りますれば、此際に御好評なり御用命を御願ひ申上ます。まとめて五拾部ならば壱円にて、百部ならば壱円八拾銭にて御送り致し得ると存じます。／一ヶ月前に申込事、皆様の御幸福を祈ります。」

をさだ生「大島便り」『靈交』第190号、
1934年9月10日

「○六月十七日は、日曜学校の開設記念会を催し、茶菓によつて座談会など致しました。／○六月十八日は、療養所満二十五週年記念祝賀会が開かれ、木下知事閣下を初め八県の代表者が集られて盛大でありました。／○六月十九日は、映画の夕が催された。／○六月二十一日は、役員軍と患者軍との野球試合があり、三対一で役員軍の勝利でした。／○六月二十六日は、浪曲の慰問がありました。／○七月三日は、エリクソン先生御一行の御来教があり、午後には万歳の慰問がありました。／○七月四日は、役員軍対患者軍の野球試合ありて、九対七にて役員軍の勝利でした。／○七月六日は、

高松よりケントウ試合の慰問があり、種々と説明と形とありて面白かつた。／○七月七日は、映画の夕が催されました。／○七月十日は、万歳の慰問がありました。／○七月二十二日は、香川県長尾町より野球軍来り、オール患者軍と戦ひしも余りの強敵にて七回戦にて、十六対〇にて惨敗した患者軍は、『とても対者でない』と呆然たる様であつた。噂に聞くと、午後に役員軍が対抗して五対〇で負けたとの事であつた。強さも強し長尾町軍…。／○七月二十三日は、MTLの幹事、後藤安太郎氏御来島にて、夕陽の残光を浴びつゝ、芝生の中に野外集会を開きました。／○七月二十四日は、岡山の難波金之助氏の御尽力にて、神宮博士の舞踊を見せて頂く。芸術の奥技に一同酔へり。博士の芸術に我らは評する力なしでありました。／○七月二十五日は、大阪の西村吾市氏と永岡市松氏との紙芝居の慰問あり、面会室にて祈りて別れました。／○七月二十七日は、高松より琴古流の先生方の御来島にて尺八、琴、三弦の曲目十一番ありて、神音にとらえられました。／○七月二十八日は、東京の方にて其道の大家の尺八の慰問がありました。尺八について親しく講義をなさりつゝ吹かれました。／○七月二十九日は、京山福造師一行の浪花節の慰問がありました。／○この日、保育所児童は大阪へ見学かたがたに、修養団の高橋昭道先生の御宅へと出発いたしました。／○七月三十日、県知事の御紹介にて神如道先生の尺八の慰問がありました。／○八月三日、療養所患者の農作物及び学芸展覧会を青年団の主催にて開きました。出品点五百点程でありました、盛会。／○八月五日は、一灯団の新谷さんが御訪問下さいました。種々な物語に夜の十時頃まで芝生で更しました。／○八月七日は、宮内先生御一行及び斯道学園々長の阿部先生とも楽しい集ひを致しました。この日保育所の児童、帰島しました。」

*「感謝欄」同前

「一、金壺円也、役所、奥村竹一様／一、金壺円也、大阪、聖光会様／一、金拾円也、愛媛、谷泰吉様／一、金七円五拾銭也、倉敷、林源十郎様／一、金壺円也、大阪、家族教会様／一、金参円也、北米英領加奈陀、鵬本正信様／右、誌代及び御寄附として頂きました。」

*「編輯後記」同前

「○島は照ります、太陽が燃えて道の小笹が葉を巻きます。夕べ涼風吹き初む頃にサツト浴びたる海水の味、汗も暑さも忘れて仕舞ふ、空に盆の月よ、若者は踊る、此処は楽しい別天地！／○火は祭壇よりは自分の純一な神恵の証言でありまして、『如何なる場合にも受洗の時の信仰に復帰して、其処より日々新に発足する幸福を』問題として皆さまに提出いたしました、御高教を切に乞ふものであります。／○鼻の方は未だ不十分である、最少し根本的に考えて鼻につく宗教論を吹き飛ばしてやりたいものである。この一般が宗教に転向なしつゝある際だ。間違ひのない信仰の光りをハッキリとかゝげ必要がある。／○根岸老師の歌は寸鉄胸をさす威力がある。そこで、『寸鉄』と改題しました。今回は眞哲君の『身の上物語』は、編輯の都合で文句を縮めた個処もありますが、大島の実相を知らるゝに好資料と信じます。／○本誌も千部に成り、三種便には成り、経済と便利とを得ました。その凡てを部数増加に致して、一人でも多くにと祈り居ります。たゞし悩める人、病める人の慰めとして活用されたいと存じます。／○靈交の価値は、『斯くした病者にも喜ぶべき神の生命がある』と言ふ事を証して居る点にあるので、内容とか文章とかは第二のものであります。第一の目的によりて悩む人病む人に貢献なし得るなれば、全面白紙で出してもよいと迄に存じて居ります。何卒私共の真禱を御掬み下さいまして、御加禱と御援助の程を切に御依

頼申上ます。／○毎月十日／切ります、其後は次号に成ります。皆様の御幸福を祈ります。」

穂波生「大島便り」『靈交』第191号、

1934年10月10日

「八月十四日、岡山県愛生園長の令嬢と島野さまと御二人とも女医専に勉強中の方の御訪問を頂き、夕方、祈の家で聖集会を開きました。／八月十七日、浪花節の慰問あり。／八月十八日、活動写真ありたり。／八月十九日、高松より三組の野球団来島ありて患者軍と戦ふ、激戦なりし。／八月二十日、天理教の布教師御来島あり。／八月二十一日、興正寺別院輪番佐々木師御来教下さる。／八月二十二日、修養団講師高橋昭道先生御一行御来島の上にて、団員初め役員患者一同に向上会を開催され、団歌の声勇しくありし。／八月二十三日、高松より二組の野球チーム御来島にて、オール大島にて戦ひ面白かりし。／八月二十六日、支那MTL主幹なる鄺志堅氏御来島、長島の林文雄博士の通訳にて御講演あり、此日京都大学の小笠原博士も御話し下さいました。／八月二十七日、浪花節の慰問あり。／八月三十日、宮内牧師、南石千代子女史、宮内彰牧師、高島龜太郎兄一行の御来教がありて、聖会を楽しく開き、主を讃へました。／九月一日、帝都大震災を記念して黙禱、此日岡山の難波金之助様の皇太后陛下の有難き御歌について感激ある講話を聞せらるゝ。一同感極まつて涙する。／九月二日、香西町より百名以上の慰問団御来島にて、菓子と麦粉とを下さる、尚ほ詠歌組の詠歌がありました。／九月三日、高松より俳句の宗匠八九名も御来島にて、兼題の俳句の開巻あり、賞品沢山頂き、更に手踊り数番の余興がありました。／九月七日、関西学院宗教部の植木氏外三名御来教、一般に善き証言をして下さいました、此日大阪医大生三名が集会后にハーモニカなり童謡を唄つて下さいました。／九月十日、浪花節の慰問がありました。」

*「感謝欄」同前

「一、金七拾五錢也、広島、協同教会婦人会様／一、金壱円也、高知、森下貞近様／一、金六拾錢也、山梨、近藤千恵子様／一、金壱円也、香川、高島亀太郎様／一、金五円也、兵庫、名和金次郎様／一、金貳円也、東京、湯沢寿貞子様／右は、誌代及び御寄附として頂きました。」

*「編輯後記」同前

「○暑さも寒むさも彼岸までと古老の言の如く秋冷の候となり、夜など夜具を着れば暑し脱げば寒むいと言ふ風である。任せ切た心で寝て寒さを感じると、引張て着ると言ふノンキさが、窓より吹き入る冷にやられたのか夏の疲労か、此頃は身体がダルくて食欲が一寸と減じて、ペン執るのが気乗がしがたい日がある。／○祈り、祈り、祈りて居ると空弱な自分の内に、何処からともなく熱と力が流れ込みて来て、勇ましくも机に向はしめられる。我れか神か、神か我か、全く神の聖能にアヤツラれる人形のやうである。有難いことである、此の罪人を用ひ活し給ふ、こゝにのみ我が生命がある現世がある。ハレルヤ／○こは生命の光なり……は未だ意に充たない処が数々あるが、また文章も龍頭蛇尾に終つたし、前後の聯絡も十分でない。然し祈つて賦与されし賜物であり、自分の偽りなき信仰でもある、マー皆さんに御判読の苦を忍んで頂くことである。／○箕哲君の身の上話は涙の底に入つた。斯る生死の境を幾回となく往来しなくてはならない病者の天地、何処に光明があるであらふ、それは次号ぐらいで話されるでせう。／○隣りの島がハツキリと浮き上つて見えるやうに成つて居る。／澄み切つた大空に南に五剣、北に小豆島が聳えて高い。丘に登つて眺めると、海面を彩る潮の流れが筋を現はして美しい。岬の近くに孤舟点々として、釣を垂れて居るも風情である。／○神旗十字架の印を、是の秋の天地に進めらるゝ、諸教師な

り諸兄弟の熱禱と奮戦のために祈るや切である。非常時世界を救ふために信仰の勇者の前進が何より力である。／○本誌は振替口座に加入致し居ります。『徳島四三九二番』であり、加入者は『長田穂波』宛に御利用を願ひ置きます。便利であり確実でありますから。／○それでは今月はこれで擱筆いたします。／皆様の御健康と聖戦の御前進を祈ります。／□お願ひ／長田穂波著『靈魂は羽ばたく』と『みそらの花』とが、ユズツテ下さる方が御座いますならば御知せ下さいませ。定価で頂き度いと存じます。」

*「感謝欄」『靈交』第192号、1934年11月10日

「一、金参円也、大阪、竹沢富枝様／一、金八拾錢也、広島、婦人会様／一、金貳円也、大阪、笠井誠一様／一、金貳円也、東京、石井しず子様／一、金五拾錢也、平井、田畠四郎様／一、金壱円也、高知、谷愛美様／一、金参拾錢也、神戸、末永三喜太様／右、誌代として頂きました。」

*「編輯後記」同前

「○今や秋空の美しさ、海潮の清らかさ、其中に陽光は輝々と充て居る。島々の松の影が、幸福らしく潮に落ちて居る……夜は夜とて月星が冴え返りて、虫の音が哀れにも秋の情をそゞろに誘ふのである。／○どうやら今号も生れ出た、小さしとは言へ一個の独立誌だと思ふと力が入る。殊に神の器たらむとの希願に祈り祈り、微力な者は骨が折れる。記し終ると大感謝を捧ぐるのである。／○手の悪い編輯子はペン執る度に、『何ぞよき自分向きの』ペンはなきかと考えさゝれる、何とかよきと思ふペンがあれば、御知せ下さいませ。現在は普通の万年ペンを使用して居ります。／○では皆さま、神の栄光の器たられますやうに祈り上げます。」

*「感謝欄」『靈交』第193号、1934年12月10日

「一、金壱円也、高松、中島正治様／一、金五円也、大阪、金沢泰治様／一、金六拾錢也、徳島、田

村保夫様／一、金武円也、京都、伊賀政太郎様／一、金武円也、京都、西垣俣江様／右、御礼申上ます。」

*「編輯後記」同前

「○皆さん、クリスマス御芽出度ふ御座ゐます。／雪が降ります、サンタの翁の鈴の音が聞えさふです。私も窓硝子に額を摺りつけて、サンタクロスのお爺さんを毎日待つて居りますの。今年は如何なる御仕事を持て来て下さるでせうか、神さまは如何なる恵みを事伝へて下さるでせうか、楽しみですよ！／○編輯を終わりました、感謝です。兎に角も、本誌も神に捧げ尽して居ります。よし拙くとも聖霊の梅よ香つて下さい、桜の花も笑つて下さい。しかし、小さき青苔の花も見捨ないで下さい。クリスマス号は出来ました。／○この年も相当に多忙に恵まれました。霊交誌も部数増加はする、第三種に認可さるゝ、振替には加入する、恵みに恵まれました。それにつけても振替には必、徳島四三九二番長田穂波、宛に御利用を願ひます。／○みなさまの御健康と御活躍を祈りつゝ、擱筆いたします。尚ほ年賀状は欠礼いたしますかも知れません。皆さま栄光を仰ぎつゝ、新年を芽出度く御祝ひなさいませ。」

(つづく)

【附記】

この連載開始時に動き始めていたリプリント版『霊交』制作が終了した。2010年8月に完成した6分冊のリプリント版『霊交』の第1分冊に、霊交会代表による制作の経緯とならんで、わたしの解説が載った。解説のフルテキストはすでに、阿部安成「史伝としての『霊交』－大島療養所基督教霊交会の機関紙を史料化する」（滋賀大学経済学部 Working Paper Series No.132、2010年5月）として発表済みである。『霊交』のメディアとしての歴史、その史料としての活用の展望をそこに記したので、

本連載はまたあらたな観点で書き始めようとおもう。

なお、本連載では史料転載にあたって、できるだけ誤記がないようにくりかえし原典と照合している。で、「」内は、適宜読点をつけた以外は、誤字や当て字もふくめて原文のとおりである。したがって、〔ママ〕のルビを打たない方針とした。